三河アララギ

２０２２年 令和４年７月 文月（ふづき）

七　月　号

第 六十九 巻　　第 七 号

ニューヨーク日記（189）

http://blueshoe.copetin.com/

BlueCat, Shoe Lady

BACK IN NY AT LODI

Blue Shoe Diaries

これがコペティンと言うものです。少なくとも我が家ではね。子供の頃から一番好きな時間だったかも。夕方位のアペリティーブ、大人はウィスキーやワインと共に。チーズなどのおつまみを食べながらおしゃべりして過ごす時間。毎日の様にアルゼンチンのおばあちゃんが家に寄る時間。そんな心地いい空間がニューヨークにも。売れっ子ウルグアイ人シェフ（ウルグアイとアルゼンチンは文化が似ている）のまあまあ新しい一日中開いているレストラン・カフェ、LODI。毎日来れるな～

This is a copetin. Our most favorite pastime. Especially because it's a big part of my memory of growing up in Buenos Aires. Every day, our grandmother would stop by in the late afternoon, for a copetin. The grownups would have a little whiskey or wine, some savory nibbles, and chat. And just spend some time together. Lodi in NY is an all-day restaurant/cafe by an Uruguayan chef who seems to know the exact sensibility of what my family wants in a copetin. It's brand new but feels like home. And it's delicious!

目次

第六十九巻第七号（通巻八二三号）

表紙・十薬の花　今泉　由利（1）
ニューヨーク日記(189)　Blue Shoe（2）
歌集　わが冬葵　御津　磯夫（4）
歌集「續々草々」　今泉　米子（5）
昭和64年一月号作品　大須賀寿恵（6）
昭和64年一月号作品　夏目　勝弘（7）
紫陽花咲きて　岡本八千代（8）
母の日　弓谷　久子（10）
貝紫染　今泉　由利（12）
揚雲雀　安藤　和代（14）
ヒトツバタゴ　山口千恵子（16）
二人三脚　清澤　範子（18）
時間とは　杉浦恵美子（20）
これから　伊藤　忠男（22）
神野新田　白井　信昭（24）
どこまでも　矢崎　直人（26）
『ことよせ』　いーはとぶ　三田美奈子（28）
水野　絹子（28）

牧原　規惠（28）
稲吉　友江（28）
鈴木美耶子（28）
吉見　幸子（29）
牧原　正枝（29）
森　厚子（29）
山崎　俊子（29）
伊藤　晴江（29）
現代学生百人一首　東洋大学
井出眞之介（30）
尾崎　利希（30）
中村　凛子（30）
蔵野　裕香（30）
知久　暖菜（31）
野宮　樹（31）
宮﨑ほお香（31）
佐々木琴美（31）
「カエルくんからの招待」　高橋　育郎（32）
『俳句』　植村　公女（34）

木村　歩歩（34）
今泉　如雲（34）
今泉　由利（35）
矢崎　直人（35）
『酔いの徒然』（123）　丸山酔宵子（36）
楽しい時間（116）　山本紀久雄（38）
絹の話（140）　今泉　雅勝（40）
本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬　本田　勇気（42）
「江上浩二の独り言」　江上　浩二（44）
初狩便り8　花野みぷり（46）
五感を澄ませば（1）　杉浦恵美子（48）
附録　矢崎　直人（49）
雑詩　桜台楼主人（50）
三河湾　佐久島　今泉　由利（52）
康鍼治療院　玄　翁　（54）
「氷魚」のことから(257)　岡本八千代（56）
編集室だより　今泉　由利（57）
「三河アララギ」について　（58）

歌集　わが冬葵

御津磯夫

傘をうつ雨の音また積む雪の白さも御墓のまへの思ひ出

ゆきずりのごとくに來り對ひ立つささぐる水もわがたづさへず

千坪をわが耕さず箱に蒔くこまかき種子は中葉春菊（ちゅうばしゅんぎく）

讀みよみし故とも知らず神さびて左千夫歌集の綴（とぢ）また絶えぬ

足跡を消しつつ流れに沿いのぼりゆきにし人の姿をつたふ

咲きみつるさくらの花にまつはりて白き蝶とぶまことの世界

石の上に鐫りて尊ぶ足跡よりたちて佛は現はれたまふ

春の日の光りの中に埃だつ祖父の若き日の唐詩集註

眼鏡すればわが足もとのかがやきて犬のふぐりの碧き花むしろ

飯田橋の驛をくぐりてちかき家汝が手づくりのプリンは甘く

歌集「續々草々」

今泉米子

際だちて紅き椿の赤く見ゆ光り澱めるわが朝のまど

米国の高校了へて大学はヨーロッパへとわれにきこえ来

庭に降りるも稀なるわれにわが翁かかげくる杏の初花の枝

おろかしく過ぎし一生（よ）かともおもひ畳の上の花びら拾ふ

椿屋敷と呼ばふふわが家の椿には光源氏といふ花もあり

東の枝少しおくれて紅梅の八重咲きの花の咲き満ちし日を

相ともに杖つき出でてわが屋敷のさくら並木の花を見とほす

縁側に坐りゐる間に咲きわたりかがよふものか庭の桜は

庭松の梢に巣らしきもの見えて見張りをつづく一羽のからす

家ごもる我にこの朝届きたりぬれなつとうと升半のお茶

昭和64年1月号作品

大須賀寿恵

しらじらと明けはじめたる門扉より露に湿れる新聞をとる
木も草も昨夜の時雨に濡れとほり光りみちたり吾が小さき庭
ベッドまでも冬陽さしくる日となりぬ胸温かく吾は昼寝す
白き花匂ふことなく莟のまま黒ずみてをりわが花茗荷
机の上を片付けおきて書く文字の墨伸び伸びと書きたる如し
努めしも努めざりしも吾が一日赤々として夕日落ちゆく
病み乍ら生き続け来て頬少し豊かになりしか冬に入りつつ
頬少し豊かになりつつこの年のまた何事もなくて暮れゆく
老眼鏡外して見ゆるものなべて小さしやさし美しくして
午後三時といふにははやくも翳り来て洗濯物のわが手に冷たし

昭和64年1月号作品

夏目勝弘

年賀葉書の買ひ戻しはしませんと答ふる日々の続きてをりぬ

ホームの草など取る予算は無い黒字となりたるＪＲの答へ

弓張の山並とみに淡き今朝今日の一日の暖かならむ

梢に一つ残れる柿の果の今朝はとみに耀きて見ゆ

まだ一本手入れ約せし櫺の木あり休日の一日思ひてすぎぬ

ひとり按摩の手の届かぬ背が痛む衰へたるか我が体力も

休日の一日をごろ寝して過す我れの望みのつひに叶ひぬ

男女の提げゐる鞄の中身などふと知りたく思ふときあり

ダンボール箱畳む仕事を思ひつくただ机より放れたきのみに

今朝ふりし雨に少し濡れてをり仐寿碑のビリの少なくなりぬ

紫陽花咲きて

蒲郡　岡本八千代

わが庭に今年も紫陽花の花咲けりああ御津先生奥様のこと浮かぶ

「三河アララギ」編集会や歌会のこと想ふ次から次と思ひ出すかな

紫陽花の花にまつわることばかり昨日の如く今こそ浮かぶ

「そんなことも知らないのかと」歌会の時にも吾は笑われたりき

不思議にも私のことを笑われたるに三河アララギ歌会が好きよ

私はいったん三河アララギに入会せしを何ごとありても楽しかりにき

わが庭に紫陽花咲けば御津先生の千坪のお庭の紫陽花はいかばかりかな

コロナ禍やわが老衰のためにかもお伺いもせず情けなきかな

今一度あぢさいの花のうす紫を見たしと思へどかなわなきかな

戴だきし菜の花画のワンピース今日より部屋に飾りおくなり

天つ人となり給ひたる御津先生もそこからわれらを見てゐて下さらむ

私たちの三河アララギ由利先生のおかげで今も続きてゐます

いつしかに夜となりつつ紫陽花の花のむらさき夜空に消えつつ

わがベッドの北窓の色も濃くなりて遠きローソンの光の中へ

紫陽花の花のむらさき明日になれば明日の色とてまた楽しまむ

母の日

豊川　弓谷久子

子の編みし熊と金時鯉のぼり飾りて我が家の端午の節句

奥山の大くすの木がいっせいに色を変えたり新緑萌ゆる

ペチュニアの花苗を子が買い来たるとりどりの色の十五本

家事すべて子に任せたり草花を植える楽しみ育つ楽しさ

母の日を今年も祝いて貰いたり生きゐる事に感謝せむ

みさと手作りの味楽しまむ先週はコロッケ今日はショートケーキ

七米の特価の布を使いきるパジャマにブラウスサンドレス

ミッキーの柄のバックを縫いあぐるディズニーファンの姪の誕生日にと

名が好きと子が貰い来し一鉢は紫淡き都忘れの花

咲き盛りたるマーガレットの一むらを叩き伏せたり夜半の嵐は

父母と麥刈りした日の思い出よ麥秋と言ふ字が心に浮かぶ

さし木より育てて一年さきがけて萼紫陽花の花の咲き初む

花の色すべてちがいて十五鉢ペチュニア咲きをり我が縁先に

真夜中の雨音激しこの雨が恵みの雨となる田もあらむ

こもりゐるくらしなれども時折に庭巡り見る梅雨も真近し

貝紫染

東京　今泉由利

三河湾佐久島の空と海との接点よ弘法大師修行の場

佐久島の空と海との境界にて弘法大師の空と海とを

薄暗い森の祠の修業の場弘法大師に太陽光届くを

一日の小さき時の間空海弘法大師への太陽光の届く試み

金槌をもてアカニシ貝を打ち砕きパープル腺を取り出す作業

アカニシ貝の苦痛知りつつパープル腺を取り出しぬその身は刺身

朝の陽よアカニシ貝のパープル腺よ貝紫の美しきこと

映像ではあるけれど二〇二二年三笠の山にいでし朝日を

アララギとオンコと笏の木と正一位と良き名をもちて私にあり

ユリの木にユリの花咲く時にして背のびしてゐる花見むとして

思い出を幾つ幾つ重ね来しこの年もまたユリの木の花

一万年前には溶岩台地だった日本列島そんなに年寄りで無い

巣鴨なるとげぬき地蔵尊の四百年の塩大福を手提げて帰る

十メートルほど太陽に近付きぬ日向ぼっこの日課あり

お願いをする存在とは思はざり心に在りぬ神と仏と

揚雲雀

豊川　安藤和代

作風にその人柄もあらわれて会いたしと思うアララギの人

一点の汚れもなくて白椿朝の庭に重なりて落つ

久に誘う伊良湖街道キャベツ畑風車クルクル歓迎くるる

青深く海は凪いて海鳥の面すれすれにひと群の過ぐ

揚雲雀聞きいし朝娘を訪い夏めく街に夏の靴買う

すでにもう父母は居まさず故郷の茶畑は若葉の光頃なり

畑角に位置占めていし大根のあまりに寂し花のむらさき

柏もち祖母の手作り大きかり思い出遠く孫と茶を飲む

芽吹きたる杏子の円ら実初夏の陽に甘える様に産毛光らす

幼き日学校嫌いと泣いた孫教師となりて七年の過ぐ

「福祉会館」太き門柱裏側に叔父の名記さるをそっと触れみる

砥鹿宮の祭りで買いし風車真夜の部屋までカラカラと聞く

きょうだいは無くとも吾れは友のいて子のいて孫いて幸せの花

参加する事に意義ありこの月も大会葉書ポストに落す

ゆく雲と岸のスカンポくっきりと写して用水流れなつ色

ヒトツバタゴ

豊川　山口千恵子

閉されし整形外科の医院あとアスファルトの広き駐車場となる

かかりつけの医院の建物壊されて更地となれり見つつ通りぬ

白々と花咲きてをりヒトツバタゴはウォーキングの道に見付けてうれし

花咲きて存在われにしめす如花の白々ヒトツバタゴは

連休に京都土産の菓子持ちて祖父の見舞と姉妹の来たり

母の日とて届けくれたり一鉢のカーネーションの紅の花

スーパーの一角をしめて売られゐるカーネーション数多「母の日」近づく

スーパーに色とりどりのカーネーション「母の日」過ぐればいつもの売場に

幼子の小さき靴の片方がポツンと落ちゐる昼下がりの道

葉桜の下を通りて入りゆく散歩の途中の村の神社に

側溝を流るる水の濁り水田植ゑはじまる田の道を行く

夜の更けて窓打つ雨の音ききゐるとりとめもなきこと思ひつつ

蜜柑山のふもとに枇杷をもぎたりきすこやかなりし父と二人

裏山の鶯しきなく庭に立ち見送りくれし父の懐かし

庭に立つ父の姿を思ひ出す鶯しきりに鳴きてゐたりき

二人三脚

春日井　清澤範子

吾八十四歳若からずいや若いとも今日の生活どちらにあるや

夫亡くば娘と二人三脚にて娘は買物吾料る人よ

亡き夫の一周忌には生れ故郷の信州へ納骨をする特急「しなの」に旅をして

一周忌の納骨は信州安曇野の青原寺供養墓に納め入れたり

納骨に片時も離さず気丈にて納骨終えた娘に感謝

夕食の献立娘と考えるベーコンエッグに若芽の卵汁

好物の娘買ひ来たうの花は野菜たっぷり吾の味付け

立ち上れば前後左右によろけるも加齢なるため医師は顔見る

五月号の表紙画をみてウドの木の酢味噌合えする頃とはなりぬ

主婦業をまだ〳〵頑張る吾なれどTの字廊下モップ掛けする

新しく取付したるクーラーは真夏日となる取替工事

又今日は庭木の剪定二度目なり夫亡き後の取り替え工事

五月と言えど真夏の如き日和なり鳥は一日中鳴き吾を癒すも

コロナにて外出ならずクーラーをかけて我が家の応接室に

夫の戒名「圓徳院義覚實道清居士」娘は涙して位牌を抱く

時間とは

蒲郡　杉浦恵美子

時間とは進むばかりじゃないと知る青春時代の友と再会

五十年互ひの家族の集合離散脈絡もなく行ったり来たり

五十年互ひの記憶はそれぞれに異なる印象持ち続けたるらし

五十年互ひの容姿は様変りされど声のみ青春時代

校庭を縁取りてゐしポプラ並木懐かしめども跡形もなし

正門を臨みて友はシャッターを押し続けてる記憶のよすがを

我が友よどれほど写真を撮ったとて我等の青春還らぬものを

青春の一時期近く寄りたれどその後の隔たり地球規模にて

高校二年春の一日我等ふたり友のピアノを聴きてゐたりき

この追想ふたりは覚へてゐぬと言ふカーテン閉して月光の曲

五十年月日隔てど変はらないこの人ほんとに人が好きなこと

人として人が好きなこと人生の第一義なる友に学べり

この次は何時かまみへん束の間が過ぎて見送る那須への帰途を

新しきリュック求めぬ何処行かん東西南北気の向くままに

さういへばコロナ禍前に福島を思ひてゐたり草野新平

これから

大阪　伊藤忠男

傘寿とて通過点なる人生の道に広がるこれからの夢

後輩に引き継ぐことの遅々として進まぬこれもこれからのこと

傘寿とて現役引けぬ我が日々の活力朝の爽やかな風

苦労して殻剥き終えたピーナツ容器にたった四分の一

報われぬ苦労に苦労積み重ねできた小山は黄金の山

晩年に何をしたかがその人の評価なるならまだ望みあり

我が息子消えて願いは今一度この手で固く抱きしめたきや

ＱＲコードで参加申し込む便利なりとて味気なきかな

勝つために手段選ばぬつわものに瓦礫の山が勲章なるか

カステラに衣服骨壺つけまつ毛アマゾン開けば買えぬものなし

原稿の締め切り焦り我がことと思へどペンのままならぬこと

年一度あるかないかの晴れの日と言われ外出る藤棚の下

産卵期桜に染る桜鯛今が食べ時何をかいわんや

目は千里耳は地獄で鼻は何かぎ分け力を何と譬えし

毎日の寄港地便りラインみて今日も無事かとほっとするなり

神野新田

豊川　白井信昭

生け垣の土留支柱の曲がり角単管三本にて立ち上げ終えぬ

入院の手術五月に決まりてより何とはなしに落ちつけずいる

御津山の葉替の済みて左右半分（ひだりみぎ）ずつに分かつ濃淡

門口のモッコウバラ千ほどの花びら今し降（くだ）れる時を

赤きバラ先ずひと花が角口の去年（こぞ）と同じき擁壁の上（へ）に

み社の葉の落ち散らばふ境内に吹き払い機の響かくる音

玉垣の道を狭めて社守か吹き払いつつ落ち葉よせゆく

入院を明日に控えてようやくに生け垣に戻すサルスベリハコマキ

豊橋の牟呂用水の通水に始まる田植え四月も半ば

早早と植えられてゆく稚苗の田さみどり色のなよなよと

病室の窓に見渡す早苗田の広ごり見ゆる神野新田

夕の陽は大きく西に傾きて静もる早苗田茜（あかね）に染めて

風薫る神野新田早苗田に五月（さつき）の風は吹き渡りゆく

擁壁に赤く咲くバラ一本に扱ぎあぐねおり日はとうに暮れ

門口のジャスミン終に生け垣に植え替えにけり雨降る中を

どこまでも

埼玉　矢崎直人

コロナ禍を歩いた歌と句の道をふりかえりみるあらためてみる

環七と五日市街道歩ききる青梅街道奥多摩湖まで

環七を南へ歩くどこまでもこの道ゆけばどこにつくのか

環七は自動車の道平和島コロナ禍にても絶ゆることなく

環七を北へと延びる街道の交通要衝所々に

河の跡電車は走る真っ直ぐに崖から下の土地見せる貌

荒川が氾濫すれば海になる震災あとの写真の風景

隅田川吹く六月の風うまき風子規の愛せる六月の風

西新井薬師を詣で団子食うお団子屋さんと立話する

「堀之内」落語のそこつ者かいな高円寺から歩いてきたと

団子屋さんびっくりたまげ目を丸く美味しいお団子食わせてもらう

西新井薬師の団子草団子脚の疲れに良く効く団子

人影の少なき葛西の公園でホットコーヒー買って海まで

観覧車グルグル色が変わってるちらっとよこめにみて通りすぐ

環七を三回に分け歩ききる歩ききったの感慨深く

『ことよせ』

西浦公民館　いーはとぶ

還暦を迎へし娘の祝ひにと寅の香合贈りやりたり　三田美奈子
白寿近き義姉（あね）さまとけふは長電話てんてこ舞ひの昭和のはなし

今もなほ老母の中に父と祖母生きてゐるらし羨ましくもあり　水野絹子
侘しきは夕暮れ時の鬼ごつこ応へぬ友よ何処にゐるやら

今日もまた膝に痛みを感じつつだましだましのわが農作業　牧原規恵
次々と咲きて散りゆく段花の美しさの中はかなさもあるか

咲く花も散りゆく花も桜花やさしきゆゑに哀れを誘う　稲吉友江
黄昏れは春愁含みて暮れにつつ愛宕の山の桜しづもる

もらひたる蕾いくつの木蓮をわが家の一番大き瓶に挿す　鈴木美耶子
海鳥をしばらく眺め海辺の道三千歩今日も歩まん

三色の花見だんごの舌づつみ幼らとしつつ今日春うらら
春休み幼ら来たりて声ひびくわれに遊びくるひとりもありて

吉見幸子

酒に菓子ドラッグストアに弁当もメダカの餌は忘れず買はむ
歌会のたえて久しき「アララギ」のかの日の君の歌に黒粋が

牧原正枝

新聞に異動発表見る今朝よ走馬灯の如かの頃浮かぶ
里近き憩いの農園懐かしく金枝花（エニシダ）を買ふかの頃のやうに

森厚子

穏やかな春の陽ざしに庭に入る草の芽柔らかに萌え出したり
枝ごとに撓に実る柚子の実を春吹く風にゆられ摘果す

山﨑俊子

三階の窓の正面の茂る銀杏いかほどの高さ目ざしゆくのか
大盛のフライドポテト前にして話の尽きぬ友との夕食（ゆうけ）

伊藤晴江

現代学生百人一首

東洋大学

テレワーク父の携帯鳴り止まない乾いた笑いおそらく上司

芝浦工業大学柏高等学校一年（千葉県）　井出眞之介　15歳

今や皆二人の自分かかえてる社会の自分とネットの自分

千葉県立泉高等学校一年　尾﨑利希　15歳

体育祭カメラごしに見る君の顔保存したのは秘密にするね

千葉県立浦安南高等学校三年　中村凛子　18歳

夏休み小湊線は都会色田舎の空気を吸いにきている

千葉県立京葉高等学校一年　蔵野裕香　15歳

リモートで祖父母の家におじゃまして電子マネーでこづかいもらう

千葉県立千葉西高等学校三年　**知久暖菜　18歳**

いまわたし泣きたい気分なんだからてるてる坊主は逆さにつるして

千葉県立千葉中学校三年　**野宮樹　15歳**

会いたいと慣れないスマホでかけてくるそんな祖父母を愛しく思う

千葉県立流山南高等学校一年　**宮﨑ほの香　15歳**

休みの日どこに行ったか聞かれたらすかさず言うよ画面の中と

千葉県立船橋芝山高等学校三年　**佐々木琴美　18歳**

童話　カエルくんからの招待

高橋育郎

耕太くんが中学一年生のときでした。理科の時間に先生が「カエルのかいぼうをしましょう」といいました。

耕太くんは、学校の帰り道に田んぼのカエルをさがしながら帰りました。

そこには、おたまじゃくしがたくさんいました。

耕太くんは、おたまじゃくしを飼いたいと思い、休みの日におたまじゃくしをとりに行きました。そこで3匹つかまえて金魚鉢で飼う事にしました。次の理科の時間に先生は、「カエルのかいぼうは、むずかしいし、かわいそうだからミミズのかいぼうに変えましょう」といいました。それでカエルをつかまえなくてもいいことになりました。耕太くんは、よかったなと思い、ほっとしました。そして金魚鉢のおたまじゃくしを、玄関の　下駄箱の上に置きました。

こうしてオタマジャクシが成長していくところを、かんさつすることにしたのです。まいにち学校から帰ると金魚鉢の　なかをのぞきこみました。オタマジャクシは、だんだん大きくなっていきます。

5日くらいたつと、うしろ足がニョッキリはえてきました。それからまえ足が生えてきて、しっぽがだんだん　ちじまってきました。

耕太くんは、金魚鉢の中に大きな石ころをひろってきて入れました。

オタマジャクシは、しっぽがちぢんでくると、おなかとおしりが、ふくらんで、やがて顔もカエルのようになってきました。

そして、すっかりカエルらしくなりました。

耕太くんは、カエルになったカエルくんに「おはよう」とあいさつして「それでは学校へいってくるからね」といって、これからカエルくんと、お話ができるなと思って、うれしくなってでかけました。

それから一週間くらいたったでしょうか。今日もカエルくんとお話しできるのが楽しみで、元気いっぱい学校から帰ってくると、金魚鉢の中にカエルくんがいません。

耕太くんは、びっくりして庭の草むらをさがしてみました。でもみつかりませんでした。

耕太くんは、せっかくカエルくんと、お話ができるのを楽しみにしていたのに、いなくなってしまったので、悲しい気持になりました。

鉢に入れた石の頭が水面から出ていたので、カエルくんたちは、石の上にのぼって、外へとびだしてしまったのです。

カエルくんたちは、どこへ行ってしまったのだろう。田んぼまでは、２００メートルくらいはなれていますから、ちゃんと、たどりつくことはできただろうか心配になりました。もう少し大きくなったら、たんぼまでつれていってあげたのにナー。カエルくんともう少し、おはなしがしたかったんだけどナー、と思いました。

その晩は、星がたくさん出ていて、とてもきれいでした。耕太くんは、三匹のカエルくんが無事にたんぼまで帰れたかどうか、心配しながら、いつのまにか眠っていました。

「耕太くん、耕太くん」だれかの呼ぶ声が聞こえました。静かな夜ですから、よく聞こえます。あたりをきょろきょ

ろみまわすと、三匹のカエルくんがいました。
「耕太くん　こんばんは。ぼくたちをカエルにしてくれて、ありがとうございました。お礼に　耕太くんを星祭にお呼びしたくて、やってまいりました」
「それはありがとう。星祭ってきっと楽しいだろうな」耕太くんは、うれしそうな顔をしていました。
　カエルくんたちは、顔を見合わせ「よかった。よかった」といって「それでは　これから星祭に出発します。いっしょに行きましょう」
　するとふしぎなことに耕太くんは体がかるくなったかと思うと、ふわっと浮かびあがった感じがして、いつのまにか空中を飛んでいました。そして、たちまち田んぼにきてしまいました。
　そこには、カエルくんたちがたくさん集まっていました。みんな色とりどりの衣装を着て、それはそれは賑やかでした。そして、耕太くんを歓迎しようと、まわりに寄ってきました。みんなの「ありがとう。ありがとう」のありがとうコールがわき起こりました。
　耕太くんは、びっくりするやら、うれしいやらで大きな声で「ありがとう」といいました。
　すると２０匹ほどの一団が、手に手にフルートやピッコロ、オーボエなどをもって現れました。
　指揮者が指揮台に上がり，タクトを振るとオーケストラがいっせいに高々とメロディーを鳴らし始めました。夜空いっぱいに広がる星たちが、歌うようにきらきらと輝きはじめました。
　耕太くんも目を輝かせて、聞いています。
「なんて素晴らしい夜なんだろう」おもわず叫びました。
　オーケストラの演奏が終わると、続いて合唱団の登場です。「これから、『おたまじゃくしがカエルになった』を歌います。どうぞ聞いてください」
　司会者の声で、歌が始まりました。おら

あとあしはえたよ　ほらごらん
こんどはまえあし　ニョッキ　ニョキ
しっぽがだんだん　ちじまって
おたまじゃくしが　カエルになった
ピョンピョン　ケロケロ　ピョンピョンピョン

まえあしさきまで　ぐんとのばし
あとあしうしろへ　ポンとける
みずのなかでは　かっこいい
カエルおよぎで　とくいのポーズ
ポチャポチャ　スイスイ　スーイスイ

カエルになれて　うれしいな
きょうはたのしい　星祭
一番星の　でるころは
みんなあつまり　ピッコロふくよ
ピコピコ　ピイピイ　コロロンロン

　歌声は続いて、耕太くんもいっしょに歌いました。
　カエルになれたうれしさを歌っているのです。それは、いのちの讃歌です。
　それから、また音楽が鳴って、みんなは踊りだしました。にぎやかな夜はふけていき、だれかが「お星さま、ありがとう」と星に向かって声高らかに叫ぶと、また続いて、ありがとうコールが、いっせいに響き渡りました。歓喜の歌声は最高潮になって、夜は静かにふけてゆきました。やがて東の空が白みはじめてくるとカエルくんたちは、「耕太くん　さようなら　元気でね」と手をふりながら　ねぐらへ帰っていきました。
（おわり）

『俳句』

もう充分生きてをりけり昼寝覚　植村公女
パン屑を撒きて広がる雲の峯
三つ編のうなじのホクロ若葉冷

逃げ水に電柱揺れて霊柩車　木村歩歩
葉桜の花をもしのぐ枝垂れ川
明日晴れよ石楠花うつす水たまり
川音に翡翠の声聞き分けて
長寿なる介護の庭の青葉かな

青嵐や絵馬に楠公清正（なんこうきよまさ）も　今泉如雲
八甲田から日や水田広々と
コミュニティバス路地を行く清和かな

幽かなる気配残して牡丹散る
小石丸桑の若葉を食ぶる音
輪郭のすっきり涼しい白鳳仏
シアノバクテリアの造りし空気夏めきて
アカニシ貝に春は来にけりパープル腺

今泉由利

春の空歩ひて不思議拾ふ道
春の闇橙色の灯の平和島
六月の大川の風子規に吹く
六月の参詣の脚草団子
六月や団子屋の眼にそこつ者

矢崎直人

『酔いの徒然』（一二三）

丸山酔宵子

『信濃路を行く』

浅間山の麓、軽井沢と小諸の中間に位置する御代田にログハウスを建ててもう２０年になる。標高は８４０メートルで大気は澄み渡り、気候は高原地帯にあるため年間を通じて冷涼で、降雨量は年間１２００ミリメートルと少なく、風は季節ごとに趣を変え、四季を通じて自然が織りなす折々の変化に富んでいる。

日本屈指の活火山である浅間山（2、５６８m）は穏やかな状況が続き、たおやかな山並が新緑に包まれて、セザンヌのセントヴィクトワールを連想させる。追分の隣で西軽井沢とも呼ばれていて、軽井沢より標高が低く、平均気温は2度程高く、しかも軽井沢特有の湿気も少なく、晴れの日が多い。そんな環境の良さから軽井沢から御代田に別荘を移したり、コロナ禍でのリモートワークで都心から引っ越してくる人たちも増えてきている。最近では名門フランス料理「ひらまつ」もホテルを浅間山の麓を走る１０００メーター道路を見下ろす絶景の場所にオープンした。

浅間山の麓に沿って走る１０００メーター道路は大浅間カントリークラブの近くにある我がログハウスの目と鼻の先。この快適な道を浅間山連山に沿って走っていくと、小諸、東御、上田そして長野へと続いている。

５月の連休を避けた月末の五月晴れの日曜日、7年ぶりの善光寺御開帳を目指して、一路１０００メーター道路を長野善光寺に向かったのである。５月の太陽は爽やかで、窓からは浅間山のオゾン一杯の空気が入り込んで心地よい。山々は新緑の緑に包まれ、そのところどころに白い花を咲かせているアカシアの花が緑一色に色どりを添え、さらに緑を濃く際立てている。。

アカシアの花が緑の濃さを映へ

酔宵子

この１０００メーター道路は国道１８号線と並行に走っていて、左手には５月の陽の光を浴びて川面が光っている千曲川が見下ろせる。日曜日にも拘らず道路は空いていて、快適に長野市へと向かうが、長野市に入れば

矢張り善光寺御開帳、混雑は半端ではない。やっとのことで、善光寺門前の駐車場に入ることが出来、いざ善光寺御開帳へ。

七年に一度、絶対秘仏である御本尊の御身替わり「前立本尊」を本堂にお迎えして行う「善光寺前立本尊御開帳」。前立本尊中央の阿弥陀如来の右手に結ばれた金糸は五色の糸に変わり、白い「善の綱」として、本堂前の回向柱に結ばれる。その回向柱に触れることは、前立本尊に触れるのと同じこととされ、ここにありがたいご縁が生まれ、その功徳ははかりしれないとのことである。

回向柱とは、御開帳期間中に本堂前に立られる高さ約10メートルの柱で、前立本尊の御手と「善の綱」によって結ばれるため、回向柱に触れることは前立本尊に触れるのと同じ御利益があるといわれる。宝永4（1707）年に現本堂が再建された際、松代藩が幕府から普請の監督を任され、それが縁となり、回向柱は現在まで300年余にわたって松代から寄進されているのである。

なだらかな長い登りの続く門前には、雨上がりの5月晴れの日曜日とあって、コロナ禍とはいえマスク姿の人で一杯。善光寺の有名な高村光雲の仁王像のある山門から回向柱への行列が続く。コロナ禍でのしっかりした対応で、ディスタンスと消毒の徹底で、約一時間。やっとの思いで、片手での回向柱への感激のタッチである。

雨上り回向柱の五月晴れ
酔宵子

善光寺参りを終え、5月の心地よい風に誘われて暫く散策すると、遠く信州の山々を背景に広々とした城山公園の空間の中に、その景観に素晴らしく調和した長野県立美術館がある。その屋上からは善光寺本堂を望め、そこには信州をこよなく愛した東山魁夷の美術館が併設されている。新緑の信州の山々が、彼の、東山魁夷の深い緑で描かれた大作が静かな空間豊かな館内にゆったりと展示されている。

信濃路の深い緑がキャンバスに
酔宵子

楽しい時間　116

山本紀久雄

2022年5月31日

「明治天皇が鉄舟から得た判断基準」その一

今月から鉄舟の生き方から学ぶシリーズとして、明治天皇を最初に採り上げる。

明治時代に日本が大きく成長したのは、この時代に優れた人物が多く輩出したことが大きいが、その背景には君主である明治天皇が政治への関与に優れていた、という要因が存在すると、伊藤之雄氏が、その著書『明治天皇』（ミネルヴァ書房2006）を書くに至った理由を、以下のように述べる。

《1890年（明治23年）代以降に絶妙の政治関与を行っていた明治天皇の資質や人間性に、それまで以上に魅力を感じるようになっていたから、というのが明治天皇を（書くことを）引き受けた二つの理由であろう》

絶妙の政治関与、その始まりタイミングが、鉄舟逝去した時期（明治21年）頃とあいまっていることを認識したい。

また、ドナルド・キーンは、NHK『ラジオ深夜便・歴史に親しむ』（特選集 2011）の「明治天皇を語る」（2002年10月17日）で次のように語っている。

《明治天皇がもし、政府の方針に横やりを入れたり、内閣の人事に介入したりするようなことがあったならば、日本の近代化はありませんでした。すぐれた人物があの時代に多く輩出したことは事実ですが、彼らの優秀さを認め、すべてを任せたことが大帝明治天皇の偉大な点であったと思います》

このように明治天皇の政治的変化があって、日本は明治時代に大きく伸びたのであるが、そこに鉄舟と明治天皇の関係が存在したことを認識する人は少ない。

明治天皇は酒が強くて、夜を徹することもあり、体格が二十貫もあって、力も強く、相撲が好みで、近侍の者としばしばとっていたが、相手した者は痣やかすり傷が絶えなかった。

鉄舟は、一度、お諫めしようと思っていた矢先、明治天皇から「お前と相撲ととりたい。立ち合わないか」と仰せられたが「自分は相撲の道はわきまえませぬ」と断った。

ところが、明治天皇はいきなり鉄舟めがけてぶつかってこようとした。座っていた鉄舟は体を横に交わしたところ、天皇はドッと彼方に打ち倒れた。

その場で鉄舟は、平素胸中に包蔵していた思いの数々を述べ苦諫申し上げ、最後に、

「只今までのご行跡の改まり遊ばさねば、鉄太郎、今日を限りに出仕いたしませぬ」

と、退出した。慌てた明治天皇は岩倉具視を鉄舟宅に派遣し、

「今までの事は悪かった。今後、相撲と酒は止めるので、そちもこれまで同様に出仕するように」と伝えた。

鉄舟は岩倉具視が帰ると、直ぐに服装を改めて参内し、不敬をお詫び申し上げたが、その後、天皇は禁酒し、相撲を止めた。酒は一月経って、鉄舟が葡萄酒を一ダース献上したので、それから解禁したが、今までのように夜を徹する飲み方はしなくなったと言われる。（参照『おれの師匠』小倉鉄樹著　島津書房2001）

明治天皇が鉄舟の苦諫を取り入れたという、ひろい御心を示したエピソードとして「相撲事件」を理解したい。

次は木村屋のアンパンである。これについては『銀座木村屋あんパン物語』（大山真人著平凡社新著 2001）を参照して述べたい。

明治2年（1869）、一軒のパン屋が芝日蔭町（今のJR新橋駅西口広場あたり）にオープンした。木村屋の前身「文英堂」の誕生である。

創業者は木村安兵衛。常陸国河内郡田宮村生まれ。江戸に出て、紀州家のお蔵番をつとめ、維新のころは江戸市中警備にあたった。維新後、安兵衛は明治政府が開設した「授産所」に勤めた。授産所とは、今でいう職業訓練所のようなところで、ここで安兵衛は「パン屋」という職業に出あう。

安兵衛は、猛烈にパンについて研究をはじめ、芝日蔭町に「文英堂」をオープンさせたのであるが、開店した年の暮れ、日比谷方面から火の手が上がり、新橋一帯も焼き尽くされ、店も燃えてしまった。

やむを得ず、翌年の明治3年（1870）に京橋区尾張町（現銀座5丁目）の空き家を借り受け、屋号も「木村屋」と改め、再スタートした。

明治7年、安兵衛の長男・英三郎が「あんパン」というヒット商品を作った背景は、「あんパン」誕生以前に食パンに砂糖を加えた「菓子パン」を考案していて、この菓子パンと饅頭の延長線上で「あんパン」を誕生させたのだという。

いよいよ鉄舟との出会いに入る。木村屋の安兵衛の妻・ぶんの弟が貞吉という。この貞吉が水戸藩の「天狗党事件」に連座し水戸藩から追われる身分になって、木村家から除籍され江戸に出て、江戸黒門町の浅利道場に通っていた。この浅利道場は鉄舟が修行したところであって、ここで鉄舟と知り合い、鉄舟の紹介で内務省に職を得た。

この貞吉が、尾張町の木村屋に出入りしていて、明治4年（1871）に鉄舟を店に連れてきた。これが鉄舟と木村屋との出会いである。

明治天皇と木村屋・「あんパン」の出合いは『木村屋総本店百二十年史』（1989年刊）にこうある。

《明治八年（1875）四月四日。創業から百二十年たった、いまの木村屋にとっても画期的な一日といえる。東京向島水戸藩下屋敷を訪問される明治天皇に初めてあんパンを差し上げる日なのだ。木村屋初代、安兵衛。二代目、英三郎。それにのちに三代目を継ぐ、弟の儀四郎らは、二週間ほど前から酒種の仕込みに余念がなかった。

その四日、へそに奈良の吉野山から取り寄せた八重桜の花びらの塩漬けが埋め込まれ、季節感をたっぷり盛って焼き上げられたあんパンは、水戸藩下屋敷に届けられた》

結果は、あんパンが明治天皇のお気に召し、ことのほか皇后陛下（昭憲皇太后）のお口に合った。「引き続き納めるように」という両陛下のお言葉。献上の世話役・鉄舟の表情もゆるんだという。

これ以降、木村屋は宮内省御用達になったのだが、「明治天皇が木村屋のあんパン食べた」という事実が、木村屋とあんパンの将来を決定づけて、今でも木村屋であんパンがよく売れているという。鉄舟なくして木村屋あんパンの今日を考えることはできない。

絹の話（１４０）

「アトリエトレビ」今　泉　雅　勝

犬頭神社に参拝

予てより三河の豊川の千両の犬頭神社に参拝したく思っていましたが、三河湾の佐久島で貝紫染めの体験会の帰路立ち寄る機会を得ました。

訪ねた時は鳥居を超えた所の一抱え以上もあろうかという桑の神木に実が沢山なっていました。

犬頭神社縁起

犬頭神社は律令国家が始動し始めた大化の改新の頃の西暦６４０に創建されたと伝えられています。

創建当時から保食神と糸繰姫神を祀って来ましたが、平安時代に成立した延喜式（９２７年）や今昔物語りには「犬頭」という社名についての記述があります。

今昔物語によれば、三河の国の郡司（国司のもとの地方官）の本妻の蚕がみな死んでしまって家は貧しくなり、桑の葉に一頭残った蚕を育てようとしたが、飼っていた犬が蚕を食べてしまい、犬を打ち殺してしまおうかと思案していると、くしゃみをした犬の鼻の穴から2本の糸が４５０両（３０００kg）も出てきて、糸が出尽きると犬も倒れて死んでしまいました。

妻は犬を桑の木の根元に埋葬したところ、その桑の木には沢山の蚕がついて素晴らしい白い繭が採れましたが、それを練ってしなやかな細い糸にする方法が分からなく、思いあぐねている所に、第二妻のもとから帰ってきた郡司は第二妻の家では黒味がかった糸しか採れないのに、その白い繭をみて驚きました。郡司は本妻のもとに帰り、艶やかな白い生糸を仕上げて家は豊かになりました。

郡司はこの話を国司に伝えたところ朝廷に報告されて「犬頭」という糸の名前で朝廷（蔵人所）に収める事になり、天皇の衣装も織られるようになりました。

「チギリ」と呼ばれるこの地域はこの繭のおかげでお金が儲かる様になりましたので「千両」と記されるようになったという物語です。

その後糸は「犬頭糸」「犬頭白糸」と称されるブランド糸となり、神社は「犬頭神社」と称されるようになりました。

令義解（律令の解説書：８３３年）によればこの地方（新城？）で採れる犬頭糸を「赤の糸」と称して伊勢神宮に奉納されたと記されており、今日でも新城で採れる糸を伊良湖岬などで御衣祭をして奉納が続けられています。しかし他説では「赤の糸」は白い糸が採れる家蚕の蚕種が中国から伝わる以前のクヌギやブナ等を食性にす

る野蚕である天蚕のうす緑の艶やかな糸であるとも云われています。

延喜式

延喜式は９０５～９２７にわたって書かれた養老律令施行細則（50巻）で、その中の9、10巻の神明帳に全国の神社が国、郡ごとに式内社（官幣、国幣に預かる神社）として３１３２座、２８６１社記されたていますが、犬頭神社の記載は無いようで式外社なのでしょう。別巻に犬頭の話が記載されていると思われます。

犬頭神社の鳥居の前に立つ大きな石柱に「郷社」と刻まれていましたので式内社でない事は確かです。それが近年モルタルで埋められて石柱の横に「昇格」と彫られていました。

犬頭神社の故事は日本の絹産業のあけぼのを物語る

今昔物語の記述は養蚕の事をよく知らない人が書いたと思われる記述ですが、実に当時の養蚕技術の進捗期の実情がにじみ出ています。

この当時は既に家の中で養蚕（蚕の完全家畜化）をしていたと思われますが、桑の木の葉にいた一頭の蚕が犬にたべられた云々は野外のクワコ（家蚕の原種）を指していると思われます。その糸はグレイ色の繭が多く、野外では鳥や猿がクワコの幼虫を好んで食べ尽くし、クワコに病気が発生すると周辺のクワコに瞬く間に伝染して死滅します。当時、クワコを家の中で飼っていたとは思われないので、もっと古くに伝わった南伝（ワダツミ＝揚子江周辺～∨島々－∨九州）のピーナツ位の小さなクワコの原色を残した繭であった可能性があります。

それは紬文化（絹綿を手で紡いだ太い糸）でした。

この記述は本妻の蚕に病気（一度発生すると暫く蚕が飼えない）が発生した事を物語っていないでしょうか。

おそらくこの時北伝（中国～∨朝鮮～∨丹後半島～∨東日本）の大粒な真っ白い蚕種（解除しやすく糸の量が多く、量産化向）と加工技術（生糸文化…細い糸）が入ってきた事を、犬の鼻から2本の糸がとめどもなく出てきたと物語らせているのでしょう。

郡司がこの繭を精錬して糸を揚げたというのも、蚕種だけが伝わって来たのではなく、絹を作る技術者も大勢（育桑、養蚕、製糸等）渡来してきて、細いしなやかな白い糸が作られ、都に運ばれ錦や綾、羅が織られる様になったのでしょう。

その集団が周辺各地に広がり、天蚕糸を伊勢神宮に奉納していた先住の人たちの利権を奪っていったものと推測されます。この時代は絹生産の大躍進の時代であった様です。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言
https://hondachiro.exblog.jp/

2022年6月1日

水分摂取量を増やす

昨日の涼しさは一休みになりましたね
もうすぐ梅雨に入ると思うと強い日差しもありがたく思います
この時期の暑さは湿度がなくカラッとしていて風が心地よくすごしやすくて良いですよね
ただ暑さの準備が出来ていない為　陽射しが強く感じます
本来　熱中症よりも熱射病の方が危険ですが
いきなりの気温上昇に水分補給が間に合わなく
熱中症になりやすくなっています
そこでスポーツドリンクをお勧めしたいのですが
スポーツドリンクは糖質が高いものが多く
飲みすぎると他の疾病のリスクが上がる可能性があります
ですので今まではイオンウォーターをお勧めしていました
ただスポーツドリンク自体大量に飲まないという方もいらっしゃいます
ここで登場するのが　炭酸　です
炭酸とスポーツドリンクを割って飲むというのをお勧めします
そうすれば量も稼げますし身体に吸収しやすい
スポーツドリンクを取り込むことが出来ます
割合はお好みで調整してください
普段はスポーツドリンクを飲まなくても良いので
100%フルーツジュースと割って飲んで水分摂取量を増やしてみて下さい
今日も笑いながら行きましょう

2022年6月3日

この時期限定の身体を守る食材

本田カイロでは5月病ではなく6月病というのを
だいぶ前から言っていますが
この6月病に対する食材を何年か前から
お勧めしていたものがあります
皆さん　覚えていますか?
それは　赤紫蘇（あかじそ）です
赤紫蘇は　免疫力の強化や粘膜を丈夫に保つ働きがあります
ウイルスに対して効果的ですよね
皮膚にも良いので紫外線対策にも効果がありそうです
本田カイロの施術と
3S+ゆたぽん　乳酸菌と株
そして

この時期限定の赤紫蘇ドリンクで
6月病を寄せ付けず感じず7月を迎えましょう
今日も笑いながら行きましょう

「江上浩二の独り言」55

江上浩二

Designという言葉と実践

最近、私の周辺でデザインという〝言葉〟がキーワードになっているシーンが多い。教育関係のInstructional Design（以降IDとする）とかイノベーション関係でDesign thinkingなどがある。実際にデザインという言葉の本来の意味を確認する為に、英英辞書を手に取る前に、これまでの自分にとってのデザインという言葉はどのようなものであったか振り返ってみた。〝設計〟というより、紙に何かクレヨンかペンで、ささっと図形を描いて、視覚的に見える図柄のような認識だった。それがそのうち、設計するという抽象的な言葉へ認識が移っていた。

さて、眼の前の英英辞書のdesignのページを開いて、ちょっとどころか非常に驚いたのである。To conceive; invent が最初の説明であった。確かに、その幾つか後に、名詞で a drawing or sketch という説明もある。いや、これまで、このスケッチや図柄という概念に引きずられていた事を反省した。To conceive; invent なんだと言われると、〝設計〟どころか、深く考え、創造し、心（意識）の中に形作るものであるという意味があり、それも他人の真似ごとでなく、最初に考えださないと、本来のdesignという言葉に値しないようだ。こう合点がいくと、教育関係のIDや、イノベーション関係のDesign thinkingが活きて来た。言葉にも命があるように思えた。時代が変わると言葉の意味も変遷して行くことも認識しておかないといけないようだ。

日本の元気さ、産業界の強みが失われ、最近では企業のグローバル経営だの、グローバル人材育成だの聞かない日はないくらいだ。さて、グローバル人材＝英語能力と短絡しがちであるが、実際英語を母国語とする様な欧州、米国でも全てがグローバル企業になっている訳ではなく、逆にグローバル企業を目指して、失敗を繰り返していることが普通である。したがって、英語能力は必要条件だが、必須要件ではない。グローバル企業経営の泥臭い話は、ここでは避けておいて、日本人の英語能力向上に関する話題に触れたい。

最近、e-learningに嵌まり込んでいて、ＩＴツールが華々しく登場し、これらを使いこなし、教育分野に大革新を起こさせる風を感じ始めている。今まで、日本人には聞きなれないIDという言葉にも出っ食わし、所謂従来型の教室で行う授業学習でも必要なことでもあったが、このIDはe-learningでは先生と生徒が面と向かい合わないので、最重要な検討課題となっている。幾つかのIDに関する著書を読んだが、その一つに、人材育成では、① 認知的能力訓練、② 知覚運動系訓練に加え、③ 態度の育成（原著の英訳の影響かもしれないが、態度だけでなく意識、やる気と受け取るのが良いかもしれない）が最も大切だと指摘している。

そうだ、これまで英語は認知訓練（知るということ）だけだと皆さん誤解していたのではないか。英語能力向上は、認知能力でなく、② 知覚運動系訓練と③ 態度育成（感情表現）ではないかということだと。そう気が付くと、先が早い。英語は言葉、実際に話して使って、作った文書などが、相手に理解されたか、解ってくれたか否か、結果をみれば学習の効果が直結する。英語は身体で覚え、相手がいるその場（環境）で、如何に振舞う実践の態度がカギとなる。

Best practice を真似する
Role play を沢山経験する
Presentation を実施する

という単純な3ステップ訓練（Edgar Dale's Cone of Learning）でいける事が解った。

これらの3ステップ訓練で一番効果の高いと思われるPresentation（以降プレゼンとする）を実施する事例について言及したい。英語だけでなく、学んだ事をどういう形でまとめ上げ、それをどのように実施すると、一番効果があがるかについて研究したEdgar Dale氏は、自分でその内容などの構成を設計し、自ら発表して、第三者に示すことが良いそうだ。統計的な評価であるが、このような学習では、自分の実行したことの90％を覚えているという。比較として、本をさらっと読んだ程度では、10％位しか覚えないそうだ。すなわち、英語で〝プレゼンを実施する〟事が英語力を向上させることでも一番効果的でありそうなことが解かる。

プレゼンは、最初は短くていいでしょう。5分として、スライドなども5ページ程度でいいでしょう。さて、学んだ成果をどのようにプレゼンするかですが、人の立ち位置がはっきりしているrole playの一役を選ぶといいでしょう。更に効果的なプレゼン手法について、お話してみたいと思います。これらも、学習に関するIDの研究から示唆されています。

文字だけよりも図や写真を取り込む
文字の替りに、ナレーションを入れる
動画の様な映像と音声を重ねる

本物の事例なども沢山参考にし、出来れば現場体験なども行う
自習的学習よりも、仲間と協調的行動をして何かを解決した例等

最後のまとめですが、プレゼンの構想を練る時に最初にやることは、このプレゼンを行う事で期待する、達成すべき目標を明確に、より具体的に定めることです。例えば、営業研修の売り込み側でなく、立場が逆転した顧客側で、こんな新しい製品を開発して欲しいという要望を仕様書案と共に提案し、相手の営業マンが絶対に請けてくれるかどうか、お互いにビジネスになると信じ込ませる位の本物の交渉が出来ることを目標とすればいいわけです。このようにIDでも、これから学習しようとする到達点、目標を最初に具体的に定めることが肝要で、そうでないと学習の過程もあやふやになってしまいます。この営業マン研修では、目標はこちらも斬新な提案をするが、絶対に営業マンを新製品製造に向けて受託してくれる、その気にさせる交渉力を身につけるという事にもなるでしょう。最初は失敗しても、次のプレゼンを行う機会を得たら、改善すればいい訳です。繰り返しも大事ですが、自分の考え方だけで失敗を改善せずに、プレゼンを聴いてくれた仲間やtutorのアドバイスも入れて、改善した方がより効果的になると思います。

実は、今回の独り言は約十年前の（２０１２年八－九月）メモに基づいたものである。

初狩便り（8）

花野みぷり

灯籠まつり

梅雨の明けた初狩は、太陽の光が朝早くから夕方まで燦々と輝き、田も畑も元気いっぱい、夏を楽しんでいる。

生命力あふれる季節に、私たちは、お天道様、山の神様、川の神様、田んぼの神様に感謝し、豊作を願って灯籠まつりをする。私たちの活動を物心両面で支えてくださった故・天野俊一さんの提案で五年前に始まった。

灯籠は、クラフト班と木工班に分かれて、和紙とペットボトル、木片とろうそくで百八個を手作りする。畦の長さが違うので数を調整し、均等に並ぶように設計図を作る。

出来上がった百八個の灯籠を田んぼに運び、畦に置いていくと、「向こうの端に灯籠が一つ足りない」「二つ余った」など、やってみてわかることもある。無事に百八個の灯籠を畔に置き、ろうそくに火を灯し終わる頃には、真夏の太陽は山に落ち、長い夏の日も更けていく。

私たちは、田んぼが見渡たせる源氏橋に移動し、田んぼアートを眺め、沈黙が続く。灯籠を見つめる一人ひとりの心に何が去来しているのだろう。

（写真・菅野昌英）

五感を澄ませば

杉浦恵美子

キュウリグサ

今年も桜便りが聞かれるようになって、我も花見にと気もそぞろ。さりとて人込みは避けたい。そこで思い付いたのは近いけれども交通には不便な山里。友を誘ってクルマで小一時間の場所に出かけました。

人里離れた窪地の小川沿いに満開の桜並木が延々。いちばん見事に咲き誇る大樹の下に腰を下ろし、それぞれ持参の弁当を広げました。互いの弁当箱の片隅には申し合せたようにブロッコリーと玉子焼が一個ずつ。

「玉子焼、塩入れ過ぎちゃった」

「じゃあわたしの甘いのと交換してあげる」

互いの弁当の品評会しつつ食事が済むと

「どうしても目で見た通りには撮れないのよね」

と言いながら友はスマホで桜撮影に夢中。

わたしは畦道に咲くタンポポ摘みをすることに。花びらでタンポポ蜜を作るため。上手にできると黄金色のシロップになります。

タンポポを摘むために屈むと、近くにワスレナグサを見つけました。よく見ようとぐっと近づくとその傍らにワスレナグサに似て、もっと小さな青い花が咲いています。

「ねぇこの花何だろう、可愛いね」

友が早速スマホで調べてくれました。

「キュウリグサだって。葉っぱを揉むと胡瓜の香りがするからだそうよ」

「キュウリグサねぇ。この花の可憐さには似合わない名前よね」

友は今度は畦道にひっそり咲く白や青やピンクの小さな野草の花々の接写に熱中し始めました。

こうしてわたしたちは、近くに人影がなかったからこそ飽きず空いっぱいの桜を見上げ、また地上に目を凝らして野草観察と、贅沢な時間を過ごしました。

さてキュウリグサと云う名を知り、今まで住所不定だった一つの野草の住所が確定したような安心感が得られました。

短歌に詠むかどうかはともかく「ワスレナグサよりさらに小さい青い花」では歌になり得ないけれど、キュウリグサと示せばピンポイント。つまり歌作りにおいて具体的な名というのは重要な役割を果たしているのだと改めて思います。

それにしても古典時代は「花」と云えばほぼ「桜」（＝山桜）を指すと云う暗黙の了解があったようですが、現代は様々なものに溢れていて、その「もの」には全て名前が付いているのですから、桜ひとつとっても染井吉野に八重桜、河津桜に枝垂れ桜等々、色や咲き方の違いがあり過ぎて、「桜」と詠んでも読み手は詠者とは異なる桜をイメージしているのかもしれません。

しかし逆に「ものの多さ」＝「名前の多さ」というのは作歌にとっては可能性の広がりを感じます。そして沢山の言葉の中から「ここにはどれがぴったり嵌るだろうか」と選ぶ作業は、わくわくした時間であり、また作歌の難しさと愉しさを同時に味わってもいます。

薄青き小花ぞ愛しきキュウリグサ勿忘草の近縁種ゆゑ

附録

矢崎直人

二〇二一年の五月から暇をみつけては歩くようになりました。それまで休日になると、話題になっている絵画の展覧会や、お祭り、あるいは、その季節に咲く花を見に行き短歌や俳句の材料を探していました。ところが新型コロナウイルス感染症拡大の影響でそういった催しは中止になり、人が大勢集まる所に行くのが憚られるようになりました。そういうわけで、私は自分の脚で歩ける所に行ってみようと思いました。

環七を南へ歩くどこまでもこの道ゆけばどこにつくのか

最初は環状七号線を歩きました。丸ノ内線東高円寺の駅から西に歩くと環状七号線が通っています。特に目的があったわけではありませんでした。この道はどこまで続いているのか歩いてみようと思ったのでした。高円寺から平和島まで二十四キロを四時間かけて歩き、着いたころには、夜になっていて公園には人影がありませんでした。街灯のオレンジ色だけが妙に明るかったです。

春の闇歩ゐて人居ぬ平和島

「春の闇」は春の季語で、月のない春の夜の暗さのことです。「闇の奥に咲く花の色や香り、芽吹こうとする木々の息吹、闇の奥にうごめく生き物たち、それらの生命力を秘めた闇である。自らを幾重にも鎧ってすごした冬から解放されて、闇にも親しく心を遣る感覚といえばよいか。」と正木ゆう子は角川俳句大歳時記で解説しています。「平和島」は東京都大田区の埋立て地で競艇場や平和の森公園、温泉などのレジャー施設があります。私は、歩こうと決めたら歩き通す意志の力強さと孤独感をこの季語に託しました。平和島の地名がそれをより一層引き立てています。

雑詩

桜台楼主人　精真

庭際緑濃やかに　露を含むんで熙り
紫黄丹白　各枝に盈つ
三春の寒暖　幾回反るも
啼鳥去来して　季の移るを伝う

雑詩

令和四年晩春四月

庭際緑濃含露熙　紫黄丹白各盈枝
三春寒暖幾回反　啼鳥去来傳季移

（語釈）○雑詩…興の趣くままに作った、型にとらわれない詩。
○庭際…庭。
○熙…ひかる。よろこぶ。やわらぎたのしむの意味を持つ。
○三春…春の三ヶ月。孟春、仲春、季春。　○啼鳥…啼く鳥。

（通釈）庭の木々や草の葉は露を含んでひかりやわらいでいる。
紫、黄、赤、白と色様々な花が庭に咲いている（多少オーバーか！）
春三ヶ月は寒暖が幾回も繰り返したが、飛び来る鳥たちは盛んに鳴いて季節の移ろいを伝えているようだ。

※春の初めは三寒四温と云うが、今年は四月に入り、夏日を記録する所もあった。テレビでは念入りに、もう冬物はお仕舞になっても良いかと思われますと云っていたのを覚えている。私もこの冬はオーバーは一度も着なかったなあと思いながら、使用したコートを洗濯に出した。途端に寒さがぶり返し、雨も降り冬のような冷たさになった。地球温暖化を心配したり、何かとせわしいものだ。晴れ間がのぞくと流石に四月の中旬だ、暖かさも戻る。

世はコロナに苦労させられるが、三月にウクライナが侵略され戦争になった。何とも云いようのない時世となってしまった。変化が激しくとも小さな自然の変化だけは穏やかな思いをさせてくれる。今六月になろうとする時、私共はコロナに大人しくしてもらって、全国記念大会の準備の仕上げにかかっている。

三河湾　佐久島

今泉由利

乗船(じょうせん)して海路(かいろ)　半空(はんくう)の中(うち)

洲白(すしろ)　生処(しょうずるところ)　塵外(じんがい)の境(きょう)

弘法大師(こうぼうたいし)　坐終日(ざせしゅうじつ)

過去未来(かこみらい)　山更(やまさら)に幽(ゆう)なり

佐久島

乗舟海路　半空中
洲白生処　塵外境
弘法大師　坐終日
過去未来　山更幽

語釈

○乗舟＝舟に乗って
○半空の中＝天のなかほど
○洲白＝土砂が堆積して、白い砂洲
○塵外＝わずらわしさのないところ
○弘法大師＝空海。平安時代の仏教界の第一人者。真言宗の開祖。
○山更に幽なり＝悟りを開いた心の穏やかさ。

通釈

新幹線、東海道線、名鉄、タクシー、連絡船…やっと辿り着いた佐久島にて弘法大師の空海和尚に出逢った。

康鍼治療院（www.yasuhari.com）

玄　翁

「夏は早起き」

夏は陽気が旺じる時
年で最も陽が長く
日の出は早くて、入り遅い
早起き養生　徳となる

夏は陽気を満たす時
太陽あびれば、陽気益す
太陽　草木の生命を
色濃く促し　繁茂する

太陽　身体をあたためて
陽気盛んで、気がめぐり
全身末端　血がめぐり
停滞解消　スッキリじゃ

夏は陽気を満たす時
この時陽気を満たすなら
陽気が全身あたためて
冬の寒さにゃ負けなくなるなる

一年通じた養生ぞ
遅く寝ても早く起き
暑さ厭わず汗をかき
草木の様に活動せい
そしたら元気が漲るぞ

夏は陽気を発散し
汗かき余分な熱を抜き
陰陽バランス整う時
発散できなきゃ熱こもり
内の潤い消耗し
秋には空咳コンコンコン

人は自然と共にある
夏は夏の養生あり
夏の早起き　陰陽元気
日が早いからこそ　早く起き
陽気をたくさん感じるべし

「気になる　気に成る」

気になることは　気に成るぞ
何かに気になりゃ　気が動く
気持ちも身体も動き出す
動いて行動　経験し
経験　心を動かして
いのちの反応引き起こす

いのちの反応　良い時は
喜び満ちて　充実す
気になることから　動きが生まれ
動けばいのちでわかってく
これが心の充実で
気持ちを満たす　気の法則

いのちの反応　悪い時
不和・不快な感じから
いのちに合わないことを知る
無理は禁物　やらんでよろし
やればわかるの法則じゃ

いのちの反応　悪くても
そこで何かが　気になれば
新たに気になることへ向かい
動いて　調べて　行動す
そしたら、新たな気を生むぞ

気になることは　様々に
いのちが求める何かがある
気になる事へと向かいつつ
何かがわかれば　満たされる

人はそれぞれ気が違い
気になることも違ってくる
気にならんことを続ければ
只々（ただただ）いのちが消耗す

気になることは気が動き
動いて　いのちが反応す
それが気と成り　いのちが満ちる

「氷魚」のことから（257）

岡本八千代

私の机の下に落ちていた反古紙を拾ってみたら、なるほどと思うことがあったので、そこから書きだしてみる。

「いよいよ老衰もひどくなってくるばかり。今日は、茂吉の『生をひきしぼって作家実行に移る時は、全身の筋神経の緊張興奮の時、これもまたぐうたらな作家活動である。決して生を得た短歌とは言い得ない。…。』などと書いてあった。今、この紙片をよく読んでみると、私まだわかったようでわからないこともある。日本の現代がそうさせるのか?今は私の生き方の考えも交じって、どう変わってくるのかわからない。昔からの日本を考えることと、これからの日本人の生き方がどう変わってゆくのか?わからな私である。

短歌よ短歌、日本人の考え方も変わりつつある。その人その人の考え方が非常に大切なことになりつつある世の中。自分自身の変わり方も冷静に客観的にみつめながら生活してゆく。考え方によっては愉しいことかもしれない。はたして岡本八千代ももうすぐ天つ人とならむ人なのに。

今こそ先に天つ人となった人たちを思いおこしたり、涙したり、朗らかになったりして、人間とは何ぞやなどと思ったりして孤独を愉しんでいる気がする。

「友あり遠くからも近くからもまた集まる。あの人にも、この人にもきっと会える。「やあちゃん。八っちゃん。八つちんちん」などとも言われたりして。」

などと、考え方によっていくらでも人の心は動くものらしい。だから楽しい。また悲しい。だからロマンチックになる。

神様が、私を色々な考え方をする人間としてこの世にお授け下さったことに、今さらもって感謝する。そうして、此の原稿を書かせて下さることはなおいっそうありがたさを思わせて下さることに感謝する。

そうして、短歌という学問的芸術にたずさわらせて下さったありがたさを思う。今、私は、啄木の真似をして、三行詩にしてみたり、していろいろと自分なりに歌の個性にも挑んでいる。…しかし、やっぱり歌いなれた昔からの歌い方になってしまう。しかし、挑戦することもおもしろい。

しかし、私は私であって、他の誰でもないのであるから、愉(たの)しい。このふてぶてしい老婆に、今しがた隣の奥さんが来て、私にと、よく実のったイチゴを下さった。さっそく娘が洗って大皿に盛ってきてくれた。

さっそく戴だく。なんとなく目がしらが熱くなってきてしまった。

「「氷魚(ひお)」の稿書きゐる時に
まっ赤(か)赤(か)の大皿いっぱいの
友よりの苺」

どうしたら三行詩の短歌になるのかしら。

感動が逃げないうちの創作とは??。

編集室だより【二〇二二年五月】

今泉由利

引越しをして、新しくなった編集室。それぞれの作業別に、机を四ヶ所に構えた。

○一番目の机は隣のビルと、私の居るビルとの間にある坪庭に、樹高二十メートルか。三階の私の窓を覆う泰山木の、今年の葉、旧い葉。カーテンの役目をしてくれている。どのは葉っぱとも、すぐ馴じみになれた。何だかはっぱでは無いような、尖ったのが見え…次の日には白っぽく、その次の日は、尖ったものがほぐれ…白い大きな、泰山木の花が咲いた。窓を開ければ、届くところ。たちまちこんなに豪華な歓迎を受け…恍惚としていた。

そして、次々花開くもの、と待ったのに、立派な大木なのに…とうとう二つ目の花が咲かない不思議を残したまま。ここには、パソコンを置いている。

○ブェノスアイレスに辿り着いて、未知に直面していた私に「アルゼンチン」を教えて下さった友人の家が、マグノリア通り（泰山木のスペイン語）、花の季節になると、真白い大きな花が、いっぱい咲く道を通って、彼女の家に着くのだった。

泰山木は、モクレン科。常緑高木、原産は、アメリカ南部。ノースカロライナ州～テキサス州。明治初期、米国より日本へ渡来。

○二番目の机は、仏像彫刻をするため。

今まで彫った仏様達が、これからの私を見張っていて下さる。

現在進行形とは、なかなか掘り進まないけれど、聖観音像。いつの間にか、掘り進んだりもしていて、かならず彫りあがる日がくる。

○三番目の机は、一番問題が多い。何とか漢詩というを作ってみたいと思ってみるものの、正直、自分には無理だ、ということがわかってしまっている。可哀相な机。だけど、次々本が積み重なって…もう手がつかない状態だけれど、どんなに山積みにしてみても無理だ！ということがわかっているけれど続けてはゆくつもり。

○四番目の机、現在進行形の事務…。毎日毎日積んでおいてはいけない事が、それでも積み重なる。しなければいけないことが、ちゃんと出来ているか。神経を使いつつ、丸い天然氷に、ウイスキーを注いで、晩酌をするスペースを作る。ブナ科の落葉高木、楢の木材で出来た樽で醸す、スコッチウイスキーの美味しいこと。このごろは、このお酒が飲める夕刻が待ち遠しくて仕方がない。

第40回 子規顕彰全国短歌大会

作品募集

〈応募要領〉雑詠2首1組（未発表作品に限る）、何組でも可。
規定の応募用紙は子規記念博物館のホームページからダウンロード（A4版）できます。
必要事項を楷書で明記し、応募料を添えてご応募ください。
（郵送の場合は郵便小為替か現金書留。直接持参も可。）

〈応募料〉1，500円（2首1組）

〈締め切り〉**令和4年8月1日（月）当日消印有効**

〈応募先〉〒790-0857　愛媛県松山市道後公園1―30
子規記念博物館内　子規顕彰全国短歌大会　係
電話　089―931―5566
ホームページ　https://shiki-museum.com

〈選　者〉秋葉四郎　坂井修一　中川佐和子　吉川宏志　片上雅仁
※順不同・敬称略

〈賞と発表〉文部科学大臣賞・愛媛県知事賞・松山市長賞・松山市教育長賞
後援賞　現代歌人協会子規記念賞・日本歌人クラブ賞
短歌研究社賞・角川『短歌』編集部賞・現代短歌社賞
選者賞　各選者　特選3首・秀逸5首・入選15首
※大会当日に発表、表彰

〈入賞歌集〉応募者全員に1人1冊送付します。（12月末予定）

〈大会日時〉**令和4年10月23日（日）午前10時より**

〈会　場〉松山市立子規記念博物館　4階講堂

〈記念講演〉講師　吉川宏志氏（「塔」主宰）
演題「子規の読者意識」

〈主　催〉松山市教育委員会
〈後　援〉文化庁　愛媛県　現代歌人協会　日本歌人クラブ　松山歌人会
短歌研究社　角川『短歌』　現代短歌社　朝日新聞社　読売新聞社
毎日新聞社　愛媛新聞社　NHK松山放送局　南海放送　テレビ愛媛
あいテレビ　愛媛朝日テレビ　FM愛媛　愛媛CATV

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所　〒一五〇-〇〇一三
東京都渋谷区恵比寿三-四五-三
フォーレストヒルズ三〇二
ケイタイ　〇九〇-八四三四-八六四六
TEL　〇三-六七六五-五八三八

◇URL　http://imaizumiyuri.jp/
E-mail　imayurizm@gmail.com

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇どなたも参加、投稿いただけます。
三河アララギ編集室　今泉由利　までご相談ください。

◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、メール、お届け下さい。

◇会費制は廃止。

◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。

◇令和四年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。

◇編集・発行　今泉由利